

戦火をくぐりぬけて

沖縄戦



沖縄島に上陸する米軍
(沖縄県公文書館蔵)

1941年(昭和16)12月8日、日本軍は米国ハワイ州の真珠湾を奇襲攻撃した後、米英に宣戦布告し沖縄戦へとつづくアジア太平洋戦争が始まりました。日本軍は宣戦布告から半年でアジア太平洋の広大な地域を占領していきますが、1942年(昭和17)ミッドウェー海戦で大敗したのを境に各戦線で連合軍の大反撃を受け、以後は敗北の一途をたどりました。戦線が沖縄に近づいてきた1943年(昭和18)、日本軍は沖縄島の読谷山村(現読谷村)、北谷村(現嘉手納町)屋良、浦添村(現浦添市)仲西に飛行場建設

しました。翌1944年(昭和19)には大本営直轄の沖縄守備軍・第32軍が創設されました。

米軍は1945年(昭和20)3月26日に慶良間諸島を占領したあと、4月1日に沖縄島中部の北谷・読谷にかけての海岸から上陸し、北と南の両方向に進撃しました。

戦争と北谷の人々



収容所へ向かう人々
(沖縄県公文書館蔵)

1945年(昭和20)2月、戦線が沖縄にいたるのに備えて、中南部市町村の住民の北部への避難が提案されました。北谷村民の退去先は北部の羽地村(現在の名護市羽地)が指定され、北谷村役場羽地分所を設け、職員を派遣して生活に必要な準備にあたらせました。当初は、退去先での生活や家財道具を残して家を空けることへの心配などから、退去はあまりすすみませんでした。しかし、1945年(昭和20)3月から始まった米軍の空襲や艦砲射撃で状況は一変しました。この攻撃で民家のほとんどが焼け、人々は命

からがらに防空壕に逃げ込みました。米軍の砲火のすさまじさを体験した人々は、準備もそこそこ北へ北へと避難をつづけました。1945年(昭和20)4月1日、米軍は北谷・読谷一帯から沖縄本島への上陸作戦を開始します。ここを起点に沖縄本島の北部と南部の両方面への進撃をはじめ、住民を収容所に保護していきました。

そのため、米軍が沖縄本島に上陸した4月1日に村内に仮設された難民収容所で戦後生活をスタートした者もいれば、戦闘に巻き込まれながら逃げ回った先で米兵に保護され近くの収容所に収容された者など、各地で戦後生活をスタートすることになりました。